

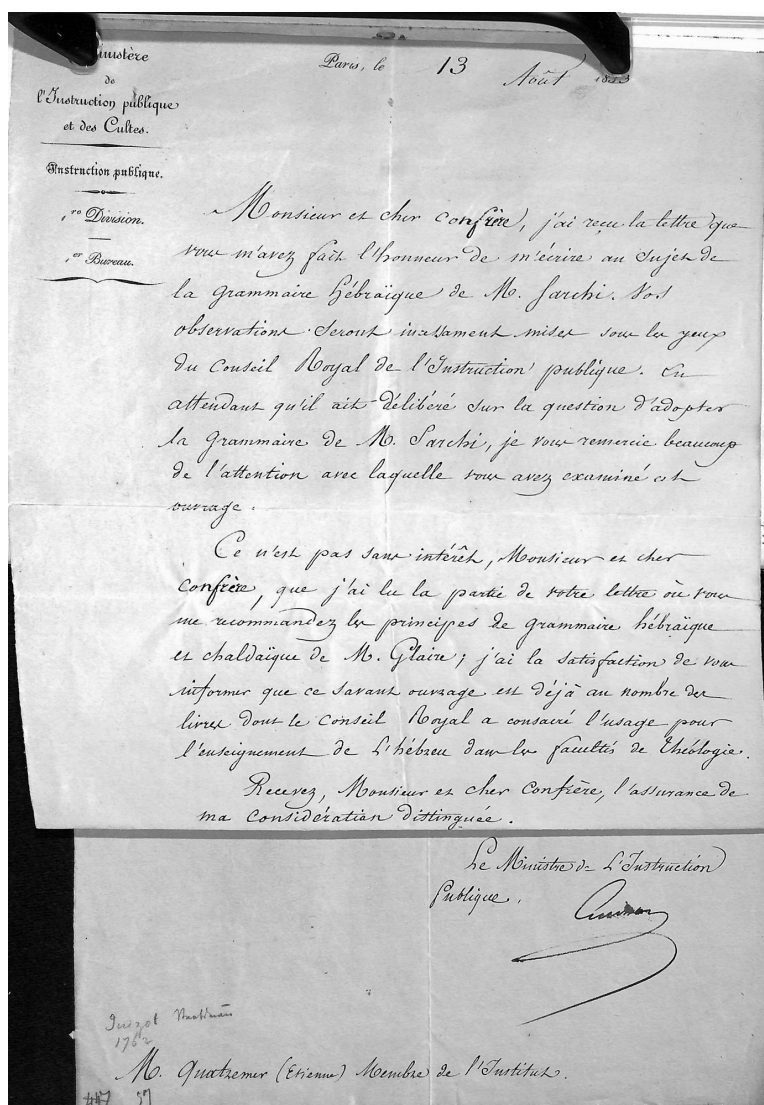
< 資料紹介 >

滋賀大学図書館所蔵 François Guizot の自筆書簡 (1833) について

御 崎 加代子

ギゾー (François Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874) は、19世紀前半に活躍したフランスの歴史家、政治家である。滋賀大学図書館は、

ギゾーがフランスの公共教育大臣であった1833年当時の自筆書簡を所蔵している。本稿の目的は、この書簡の内容を示すことにある。



1833年8月13日付 ギゾーの書簡

滋賀大学図書館は2018年2月に、ギゾーの代表作『ヨーロッパ文明史：ローマ帝国の崩壊からフランス革命まで』の英訳版(1839)¹⁾を購入した。その書籍に添付されていたのがこの書簡である。

ギゾーはフランスの七月王政期、1832年から1837年まで公共教育大臣の職にあり、数々の教育改革に携わった。この書簡が書かれた約二か月前、1833年6月23日には、有名な初等教育法案「ギゾー法」が成立している²⁾。この書簡にも公共教育省の便せんが使われ、肩書も「公共教育大臣」となっている。

ギゾーがこの書簡を宛てた相手は、結論から言うと、便せんの一冊下に記された“M. Quatremère (Etienne) Membre de l'Institut”「カトルメール氏(エティエンヌ)学士院会員」と考えてほぼ間違いはないだろう。実はこの部分は、宛名なのかメモなのか、断定できないのであるが、ギゾーがこの書簡を自分の「同僚・同業者(confrère)」に宛てているということは、

本文から明らかである。仏語辞書によれば confrèreは、アカデミー会員の間で特に用いられる。実際、エティエンヌ・カトルメール(1782-1857)という東洋学者が、1815年に、フランス学士院を構成する「碑文アカデミー(l'Académie des inscriptions)」の会員になっている。ギゾーもまた1833年にこの「碑文アカデミー」に加わった³⁾。したがって、書簡の相手が「アカデミーの仲間であるカトルメール氏」であれば筋が通る。さらにカトルメールは、1819年にコレージュ・ド・フランス(Collège de France)のヘブライ語教授の地位にあり、その分野での第一人者であった。本書簡の内容とその極めて礼儀正しい文体から判断して、相手はこのエティエンヌ・カトルメールであると判断してよいだろう。

なおこの書簡が具体的に、ギゾーの公教育大臣としての改革にどのように関わっているのかについては、今後の検討が必要である。

書簡の原文⁴⁾

Paris, le 13 Août 1833

Ministère de l'Instruction Publique et des Cultes.

Instruction publique.

1^{er} Division.

1^{er} Bureau.

1) この書籍は、ギゾーの著作に加えて、ケトレの『人間論』の英訳版(1842)、ロバートソンの『スコットランド史』(1840)の三つの著作の合本である。その書誌情報は以下の通りである。

General history of civilisation in Europe: from the fall of the Roman Empire till the French revolution; A treatise on man and the development of his faculties; The history of Scotland: during the reigns of Queen Mary and of King James VI. till his accession to the Crown of England, with a review of the Scottish history previous to that period. by M. Guizot; by M.A. Quetelet; by William Robertson Edinburgh: William and Robert Chambers, 1839-1842.

2) 「ギゾー法」の詳細については、大津尚志「19世紀前半フランス初等学校における道徳・宗教教育」『武庫川女子大学大学院 教育学研究論集』(第12号 2017)を参照されたい。

3) <http://www.academie-francaise.fr/les-immortels/francois-guizot>

ギゾーは1836年4月にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれた。本書簡のサインがギゾー本人のものであることは、同機関のサイトで確認できる。

4) 本書簡のトランスクリプションについては、リヨン第2大学名誉教授 Jean-Pierre Potier 教授から助言を得た。

Monsieur et cher confrère, j'ai reçu la lettre que vous m'avez fait l'honneur de m'écrire au sujet de la grammaire hébraïque de M. Farchi. Vos observations seront incessamment mises sous les yeux du Conseil Royal de l'instruction publique. En attendant qu'il ait délibéré sur la question d'adapter la grammaire de M. Farchi, je vous remercie beaucoup de l'attention avec laquelle vous avez examiné cet ouvrage.

Ce n'est pas sans intérêt, Monsieur et cher confrère, que j'ai lu la partie de votre lettre où vous me recommandez les principes de grammaire hébraïque et chaldaïque de M. Claire ; j'ai la satisfaction de vous informer que ce savant ouvrage est déjà au nombre des livres dont le Conseil Royal a consacré l'usage pour l'enseignement de l'hébreu dans les facultés de théologie.

Recevez, Monsieur et cher confrère, l'assurance de ma considération distinguée.

Le Ministre de L'Instruction Publique,
Guizot

M. Quatremère (Etienne) Membre de l'Institut

書簡和訳

1833年8月13日パリ

公教育文化省
公教育
第一局
第一執務室

親愛なる同僚へ

ファルシ氏のヘブライ語の文法書に関するお手紙, 受け取りました。あなたの反対意見はまもなく、公教育評議会に示されるでしょう。ファルシ氏の文法書採用の問題について審議を終えるのを待ちつつ、私はあなたが注意深く、この書物を検討してくださったことに厚くお礼を申し上げます。

手紙で、あなたはクレール氏のヘブライ語とカルデア語の文法原理を私に勧めてくださっていますが、それについて興味がないというわけではありません。この学問的な著作はすでに、評議会が神学部のヘブライ語教育で使用することを承認した書物の一冊であることを、お知らせできることを喜ばしく思います。

敬具

公教育大臣
ギゾー

カトルメール氏 (エティエンヌ) 学士院会員

François Guizot's letter (1833) preserved in Shiga University

Kayoko Misaki

François Pierre Guillaume Guizot (1787-1874) was a well-known French historian and statesman. Shiga University Library owns his 13 August 1833 letter that was attached to a copy of the English version of his main work, *General history of civilisation in Europe: from the fall of the Roman Empire till the French Revolution* (1839). The letter was written during his term as Minister of Public Education (1832-1837) and dealt with Hebrew grammar education. Guizot had probably addressed this letter to his colleague at the Academy of Inscriptions, Etienne Quatremère (1782-1857), who taught Hebrew and Aramaic in the Collège de France from 1819.

This article contains the text of the letter and its Japanese translation. It may well be left to scholars to argue how this letter was related to Guizot's academic and educational reforms during the July Monarchy.